みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

ミャオ族銀飾りの文化賞析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 黔濱 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008871

塚田誠之編『西南中国少数民族の文化資源の“いま”』
国立民族学博物館調査報告　109:103-110(2013)

ミャオ族銀飾りの文化賞析

李 黔 濱
訳：岡　晋

ミャオ族は歴史上、絶え間なく北から南へ移動した民族である。時間的には、蚩尤（中国神話に登場する神）が涿鹿（現、河北省涿鹿県一帯）で敗れてからの数千年にわたる移動、空間的には黄河流域から中国南方辺境、さらには東南アジアへと至る長大な道のりの移動である。ミャオ族は現在に至るまでに長江、珠江、湄公（メコン）河、紅河の各水系を主要な居住地とする分布域を形成し、同時に山地の閉鎖的環境という制約によって分散して発展した。そのため、ミャオ族は内部に多数の支系（サブ・グループ）を形成することになった。完全な統計ではないが、ミャオ族の支系は200余にも及ぶ。

ミャオ族はもともと「認衣服開親」の習俗があった。すなわち、同じ衣装を姻戚関係の目印として支族内での婚姻を進めてきた。そのため、ミャオ族の衣装は豊富かつ多彩で、衣装の構成要素としての銀飾りも非常に種類が多く、広まった地域も広い。また、１人分に用いられる銀飾りの数と重さがかなりある。そのため、中国少数民族の中でも、ミャオ族は銀飾りを用いる屈指の民族となった。

文献と考古資料から明らかな点を総合すると、ミャオ族の銀飾りは明代にはじまったと断定することができる。その根拠として、第一に、明代以前の文献史籍の中には「苗傜民族（ミャオ・ヤオ諸族）」が銀飾りを身に着けていたという記載がない。第二に、唐・宋代には既に多くのミャオ族が貴州に移住しているが、現在までその地域からミャオ族の銀飾りの出土報告が無い。第三に、「五溪蛮」と「苗傜（ミャオ・ヤオ）」の習俗を記載した史籍の中では、宋代の朱輔による『溪蛮叢笑』にのみ、「山傜婚娶聘物以銅與鹽（山傜の結納の品は銅と塩である）」の記載があり、明代以前の五溪一帯に居住していたミャオ族がまだ銅を貴重な金属と考えていたことは明らかである。明代の1413年に貴州に省（承宣布政使司）が置かれると、銀を貨幣とする経済様式がミャオ族地区に入り、物々交換からなるミャオ族社会の伝統的な貿易形態を大きく変えた。ミャオ族が銀を飾りとする記録もこの時期の史籍から現れはじめる。例えば、明代の郭子章が著した『黔記』の「富者以金銀耳珥，多者至五六如連環（金持ちは金銀で耳飾りを作り、多いものでは５つ６つに至り、連なって環のようであった）」や、明代の嘉靖『貴州通志』など、貴州の重要な地方文献にも関係する記載がある。

清代の史籍には更に多くの記載が見える。清代は、ミャオ族の銀飾りが普及した時期で、ミャオ族の銀飾りが猛烈に発展する重要な基礎を築いた時期と言える。現代、とくに20世紀80年代に、ミャオ族の銀飾りは発展のピークに達し、ミャオ族を表わす文化的

な記号となった。

ミャオ族の銀飾りは主に長江水系の清水江、灕陽河、沅江の各流域と、珠江水系の都柳江流域に分布する。その他の地区では疎らな分布がみられるものの、その数は多くない。分布区域内で銀飾りを用いるその多寡は、物産経済の影響を受けており、豊かな土地であればあるほど銀で飾る風習は盛んである。

ミャオ族の銀飾りは種類が多く、製品がそろっており、頭から足までみな特徴ある装飾品である。それは大きく頭飾り、首・胸飾り、背飾り、腰飾り、衣飾り、腕飾りの6つに分類することができる。まれに脚飾りがある地域もある。

頭飾りには銀角（角や羽を模した頭飾り）、銀扇（扇状の頭飾り）、銀帽（帽子状の頭飾り）、銀冠（冠状の頭飾り）、銀囲帕（頭巾状の頭飾り）、銀飄頭棑（筏状の形をした頭飾り）、銀髪簪（簪状の頭飾り）、銀頂花（先端に花の付いた頭飾り）、銀網鏈（鎖状の頭飾り。簪の一種）、銀花梳（模様が施された櫛状の頭飾り）、銀耳環（イヤリング）、銀童帽飾（子どもが被る頭飾り）がある。また、首・胸飾りには銀項圈（ネックレス）、銀棑圈（硬い輪で造られたネックレス）、銀圧領（首から下げるやや大きめの半円状の装飾品）、銀胸牌（長方形あるいは半円形のネックレス）、銀胸吊飾（胸部の吊し飾り）、銀囲腰鏈（帯状の鎖の胸飾り）がある。さらに、背飾りには銀背吊（吊す形状の背飾り）、銀背牌（銀片を繋ぎ合わせた背飾り）があり、腰飾りには銀腰帯（ベルト）、銀腰吊飾（腰用の吊し飾り）がある。衣飾りには銀衣片（凹凸で模様を描いた大小様々な銀片）、銀泡（銀板に泡状の飾りがほどこされたもの）、銀響鈴（鈴）、銀衣扣（ボタン）があり、腕飾りには銀手鐲（腕輪）、銀手鏈（鎖状の腕輪）、銀戒指（指輪）がある。また、まれに子供が脚輪を身に着ける習俗もある。

明代にミャオ族社会に入った銀飾りは、民族化すると同時に取捨と創造の過程を経験した。この過程において、共同体の人々の需要は芸術作品の基準と原動力であり、人々のアイデンティティは芸術作品が実現できるかどうかの重要な指標であった。とりわけ清代末期にミャオ族内部で銀細工職人が出現してからは、銀飾りの使用は民族の審美感と合致し、民族文化としての銀飾りは身に着ける人の需要を満たした。また、ミャオ族の銀細工職人は構図から見れば、婦女の刺繍文様から学んだ。例えば、ミャオ族の刺繍の中の「求子図」、「官人騎馬紋」、「蝶紋」、「魚紋」などは銀飾りの構図として大量に引用された。これらの構図や文様は、実質的には、ミャオ族婦女が生育や宗教的な祈願を衣装の上に針と糸で表現したものであり、身に着ける人の需要に合わせることも、民族全体の文化的要求を表すこともできた。ミャオ族の銀飾りは民族化の過程で、極めて大きく歩みを速める条件を得た。

ミャオ族は古くから「以銭為飾（銭を飾りとする）」の習俗があり、この習俗は銀飾りの出現後もそのまま残り、銀飾りの流行にも矛盾しなかった。さらに重要なのは、「以銭為飾」を通じて、移り行く富を誇る心理がミャオ族の銀飾りの価値の方向性に終始影響

しつづけ、表象レベルでは、銀飾りに対する「大きいものは美しい」「多いものは美しい」「重いものは美しい」という３つの芸術的特徴を生みだしたことである。

西江式の銀角はミャオ族の銀飾りの「大きい」ことで美しさを追求した典型的なものである。ミャオ族の銀角は３種類にわけることができる。即ち西江式、施洞式、排調式である。西江式は最も大きく、２つの角状の幅は約85㎝、高さは約80㎝で、広さや高さを問わず、平均すると、身に着ける人の身長の半分に達する。未婚女性たちは身に着ける際に、銀角の天辺にさらに鶏の羽を挿す。この鶏の羽は風で揺らめき銀角をさらに高く見せる。実際、大きく積みあがれば山になり、高くそびえる美しさを表し、水が大きく広がれば海になり、茫洋たる美しさを表す。このことからわかるのは、銀飾りに対する「大きいものは美しい」という審美的傾向が反映された富を誇示する心理と、造形美術の法則が一致することである。

都柳江流域のミャオ族地区で流行している銀桿圏は、ミャオ族の銀飾りの中でも「重いものは美しい」とする代表的なものである。黎平（県）ミャオ族の塹花桿圏（模様が彫られた環状のネックレス）は重ければ重いほど良いと言われており、最も重いものは13個から構成されている。銀桿圏は小さいものから大きいものまで輪が重なり合い、その重さは４kgを超える。

ミャオ族の銀飾りの「多いものは美しい」とする芸術的特徴はとても驚異的である。耳輪（イヤリング）の多いものは３、４個が連なって肩まで垂れさがり、腕輪は６、７対あって肘付近まである。また、胸の部分を装飾する項圏（ネックレス）は10余あって、それでも足りずに、いくつかの地方ではさらに胸牌（メダルの類）を飾りつける。清水江流域の銀衣は、数百にも及ぶ部品を組み合わせ、その重なりは複雑である。ミャオ族の「多いものが美しい」とする芸術的傾向は、ミャオ族の銀飾りの最も人の心を打つ特殊な魅力を構築している。それは、極めて個性的で、手が込んだ美しさである。

ミャオ族の銀飾りはその民族化の過程で、中原文化の伝統的な要素を合理的に選択、保持してきた。それにより、ミャオ族の銀飾りは鮮明な個性を呈すると同時に、中原地域の銀飾り芸術の古典的色彩も明らかに示している。黄平県でみられる谷隴式の銀鈴多墜項鏈（銀鈴を多く下げたネックレス）では、銀鏈墜（鎖状の下げ飾り）を構成する武器を模ったものの中に、いくつかミャオ族地区で用いられていない武器が見て取れる。これは明らかに他の民族のものを踏襲している。武器を飾りとする「五兵佩」は漢代に流行した、当時の中原地域の魔除けであった。ミャオ族の銀飾りは一方ではその形と構造を保ち、他方ではそこに改良がなされて、銀の爪楊枝と耳掻き、毛抜き等の実用的な下げ飾りが加えられた。そのため「五兵佩」の吊し飾りは、ミャオ族地区では通常「牙籤吊（爪楊枝吊し）」と呼ばれている。

また、黄平県の谷隴式の銀帽は、そのデザインに古代の「步搖（婦人の頭飾り）」の長所が充分に受け入れられている。步搖は、戦国時代早期の『釋名・釋首飾』に「步搖，上

有垂珠，步則搖動也（歩搖とは、上から珠が垂れており、歩くと搖動する）」として現れる。谷隴式の銀帽は半球状を呈し、その上には一般的に、銀花、銀雀、銀虫が均一にリード状の銀の糸を用いて帽子本体と繋がり、その枝が揺れるようになっている。帽子を被る人が体を動かせば、銀花は揺らめき、頭全体が小刻みに揺れうごく。

このほか漢族地区の長命鎖（小児が付ける錠前形の首飾り）は、その原型は重くもなく簡単な形で、正面に「長命百歳」の字が彫刻されており、もともと子女の平安な成長を祈願し、魔を除けて吉を授かる意図がある。長命鎖がミャオ族社会に流入してから、まず重量が増え、人を驚かせるほどまでに達し、清水江や沅江流域で流行している銀圧領に変化した。次に、形は複雑になり、龍や鳳凰が彫られ、麒麟が飾られ、しばしば透かし彫りも重ねられた。例えば、施洞式や西江式の銀圧領がそうである。そして最後に、飾りを身に着けるのも、子供から思春期の少女へと変化した。飾り物のもともとの祈願の意図は薄くなり、人びとに見せるための装飾の意図が中心的な位置を占めるようになり、結果的に飾り金具がもつ文化内容に本質的な変化が発生した。ミャオ族の銀飾りは中原文化の要素を非常に多く留めており、そのことは枚挙にいとまがない。だからこそミャオ族の銀飾りは、民族の境を越えて、中国の各民族から鑑賞と親しみが得られ、人びとを古代の首飾りの歴史の情緒へと誘うことのできる現代の装飾品になったのである。

周囲の環境も、ミャオ族の銀飾りの形に重要な影響を及ぼしている。ミャオ族の銀飾りの紋様と形は、特定の山地環境の動植物と関係がある。台江（県）施洞（鎮）のミャオ族の糸で編まれた腕輪は、粟の穂を模して編んであり、俗に「小米鐲（粟の腕輪）」と呼ばれている。それは形が本物そっくりであるばかりか、糸で編む手法を利用して粟の穂のあの細かい毛のきめの細かさまで表現している。剣河県で流行の柳富式の三角折畳銀片項圏（折り畳み式のカード状のネックレス）は、俗に「千葉項圏（葉が連なったネックレス）」と称されている。形の上では複雑なモノを簡単に表す手法を取り入れ、環状の銀片に圧力痕を用いて、葉の連なり合う装飾効果を造りだしている。山区には小鳥が多く、鳥の紋様はミャオ族の銀飾りの中で主要な題材の１つである。清水江流域で流行の銀花簪、銀花梳、銀花帽といった頭飾りには、小鳥を主要な形とするものが多い。都柳江流域の丹寨県でみられる雅灰式の銀角は、角にさらに鳥の羽を付けて芸術的な形を作っている。要するに、生活の様々を取り入れ、自然を師とすることは、ミャオ族の銀飾りの芸術的造型の１つの大きな特徴といえる。

文字の無い少数民族であればあるほど、表現様式が受ける相対的な制限によって、生活の中から発生する芸術的な造型や飾りの紋様制作が、民族文化の心理的対応としてますます強くなる。ミャオ族の銀飾りはほとんど例外なしに、記録と叙述の機能を持ち、豊富に抱え持つ内容によって、無文字文化における重要な伝達者となっている。

ミャオ族は原始宗教を奉じる民族である。ミャオ族の服装の中で、龍紋は極めて多く、牛龍、魚龍、羊龍、ムカデ龍、蚕龍、馬龍等がある。銀飾りには蛇龍、魚鍬龍、牛鼻龍

等が反映されている。いかなる動植物の「龍化」も、全てがミャオ族の信じるアニミズム的な宗教観に由来する。ミャオ族の銀飾りの中に出現する龍紋の多くは飛び翔る形状で、これは中心地域の「漢龍（漢族の龍）」と図柄上では明らかな継承関係があるか、あるいは関連するモノを踏襲してきた。しかし、その文化の内容について言えば、漢族の龍とは大きな距たりがある。

台江県施洞鎮のミャオ族女性が頭の上に被る施洞式の龍頭銀簪（龍頭模様が施された簪）は、現地の活き活きとした伝説に由来する。伝説中の龍は清水江両岸に禍をもたらす悪龍で、かつて罪業をなしたために人の手で殺された。しかしその死後、にわかに悔い改めて人類に幸福をもたらす龍となった。そこで当地のミャオ族は恨みを愛情に変えて、毎年一度の龍舟節と、女性の服装の中の龍紋で龍を記念した。これは漢族の観念上にある少しも欠点のない冒涜の許されない龍とは明らかに異なるものである。

ミャオ族社会では、銀飾りの呪術的機能が明らかに見て取れる。宗教施設の極めて乏しいミャオ族地区では、服装の紋様や形が往々にして呪術的な意識の表現を補っている。その上、一日中身に着けることで、間違いなく日常生活の中の呪術的行為を表している。ミャオ族の篤い信仰はおおよそ、茨や鋤の刃のように鋭利なモノが邪気を払う役割を備えており、そのため、丹寨県でみられる雅灰式の銀雕花木梳（銀で模様が彫られた木櫛）は、まさに櫛の裏にある円錐の形でもって、身に着けた人の邪気を払い、吉を授ける加護がある。丹寨県一帯でみられる銀胸牌は現地の女性の嫁入り道具の１つで、婦女が嫁に行ってから終世身に着けなければならない装飾品である。銀胸牌を身に着けて装飾することはこの装飾品の１つの意味でしかなく、銀胸牌の菩薩に、身に着ける人の一生の平安を期待することこそ、この装飾品のより重要な意味である。当地で流行の銀菩薩花梳（菩薩が彫られた櫛状の頭飾り）にも同様の願いが表現されている。榕江県や丹寨県はともに月亮山地区にあって、そこに居住するミャオ族もまた同系統に属している。彼らは、険しい山地の住環境のため鬼神（神霊）文化が比較的発達しており、銀飾りにも更に多くの呪術的な意識が反映しているのは自然である。谷隴式の銀腰帯（ベルト）や舟溪式の銀背牌（背飾り）もそうだが、多くの菩薩を模ることでもってこの期待を表現していないものは１つとしてない。

清水江流域のミャオ族の銀衣装は、ミャオ族の銀飾りの名声を世に知らしめる代表的な衣装で、合計200以上の銀飾りは、人を驚愕させる組み合わせを作り上げた。このような、銀がきらきらと輝くゆったりと豪華な銀装の設計は、はじめは富を誇る心理から生じ、そして当地の結婚と恋愛の習俗の需要に従っていった。清水江流域の多くのミャオ族地区には蘆笙堂があって、節句の時、男性が前で伝統的な楽器の蘆笙を吹き、娘たちが後ろで踊る。習俗の規定によれば、青春期に入ってまだ結婚していない娘たちにだけ、参加する資格がある。実際にこれは娘が青春期に入ったという知らせをはじめて社会的に公告するものであり、未婚女性が大勢の観衆の前で、生まれてはじめて公然と結婚相

手探しをするものであり、娘たちが新しい人生の旅に出向く起点でもある。全身が眩い銀装は、ただ未婚女性の美しさを増幅させる衣装であるのみならず、未婚女性が蘆笙堂に行く際の入場券でもある。習俗の規定によれば、銀装を身につけていない娘は、身なりがどんなに素晴らしくても入場資格はない。そして、銀飾りの多さは、未婚女性の家の財力の程度を表し、疑いなく女性が嫁ぐ際の重要な手形となる。まさにこうしたことから、清水江流域の蘆笙堂における女性の全身の銀装は、最も重いもので10kg余もある。この驚くべき重さは、結婚と恋愛の習俗の要求に応じたものであり、まさしくミャオ族の銀飾りの影響と作用に対する社会的機能の反映でもある。現在の蘆笙堂には、多くの銀装した女児も喜んで入るものの、これは成人儀式の性格をもった入場とは根本的に区別があり、ただ単に富を誇るミャオ族の銀飾りの機能の強さを反映しているにすぎない。

ミャオ族の銀飾りは、同時に未婚女性の嫁入り道具でもある。家庭の銀飾りは、はじめはまとめて使用し、順番に蘆笙堂に入る自分の娘たちに提供して、結婚相手を探している成人であることを公表させる。すべての娘が嫁に行くのを待って、母親は数少ない必需品である腕輪、イヤリング（耳輪）、簪を除いた全ての銀飾りを娘たちに均等に分ける。すでに婦人となった娘たちは、自分の家の経済状況に応じてその基礎の上にさらに買い足して、自分の娘が青春期の時に必要な銀飾りを準備し、繰り返し引き継いでいく。ミャオ族には「娘は、家を分けることができず、土地を分けることができないが、１つの銀角があれば一頭の牛を引いて行くことができるに等しい」という諺がある。

現代のミャオ族の銀飾りはみなミャオ族の銀細工職人の手によるものである。銀飾りに対する大量の需要によって、ミャオ族地区では、村中の多くの家庭が銀飾りの加工を職業とし、代々それを引き継ぐ「銀匠（銀細工職人）村」が数多く出現した。長江水系の沅江や清水江流域と、溆陽河流域のミャオ族の銀飾りはきめが細かく巧みに造ることに長けており、珠江水系の都柳江や融江流域のミャオ族の銀飾りは無器用な形で荒々しい特徴があり、両者の特徴の違いは明らかである。貴州は銀の産地ではないため、中華民国以前のミャオ族の銀飾りは主に馬蹄銀から採取していた。

中華民国時代に入ってからは、長江水系では袁世凱の横顔が入った一圓銀貨を主な材料とし、珠江水系では「廣東貳毫」（二角銀貨）を主な材料とした。銀飾りに含まれる銀の量は、材料である銀貨が原因で、長江水系の銀飾りの純度はやや高く、加工製品もそのために比較的精細なものになっている。

ミャオ族の最初の銀細工職人は、多くが鉄細工職人からの転業であったため、鉄細工職人の技巧を身に着けており、漢族の銀細工職人を師と仰いでいた。雲霧山地区の銀飾りの加工村のように、現在でも「打鉄寨」という古地名はまだ用いられている。歴史上、ミャオ族の銀細工職人の技の伝授は、男子に伝えて女子には伝えず（内に伝えて外に伝えない）という決まりがあり、跡取りがいないものは、父方の甥を弟子とした。現在では外部に伝授する人が徐々に増えている。

銀飾りの加工は、全てが家庭を仕事場として、手作業でなされる。需要に応じて銀細工職人は、はじめに銀を銀片、銀条（棒状）、銀糸に加工し、鋳型や、精密な彫刻、編み、溶接などの技術を用いて精巧で美しい製品をつくる。その後、「洗銀」即ち、製品に硼砂水を塗って、木炭であぶって汚れをとり、さらに純度の高い銅の鍋の中に入れ、明礬水で煮て清水で洗い、銅を徹底的に擦り落として、１つの銀飾りがようやく完成する。「洗銀」は、新しい製品に対してだけではなく、時間が経って酸化して変色した古い製品に対しても行われる。数年ごとに、ミャオ族はみな自分の銀を銀細工職人に届け、「洗銀」によって銀を一新し輝かせる。

これまでに、ミャオ族の銀飾りは３つの方面において変化があった。第一に、多くのミャオ族地区の飾りは既に銀ではなく、白銅系統のものになっている。白銅は色が銀に似ており、また廉価であるため頗る普及した。さらに、ミャオ族の銀細工職人たちが、かつては出来なかった白銅の精巧な加工や銀メッキ処理の難題を技術的に解決させたため、白銅の装飾品が大いに勢い付いた。第二に、銀飾りの形と模様に変化があった。一部の新しい形の銀飾りは施洞地区の龍頭耳輪のように、既に共同体の人々の間で認可され、当地のミャオ族女性が身につけるものとなっている。これはミャオ族の銀飾りにおける発展と創造である。その上、大量の銀飾りは市場の需要に準じて作られるため、形は奇怪さが誇張されており、ミャオ族の銀飾りの看板を掲げていても、白銅の工芸品にすぎない。第三に、銀細工職人の村の解体である。黔（貴州省）東南部では、かつて銀匠村が少なくなかった。控拜村のような著名な銀細工職人の村では、村に202戸の家庭があって、263人が銀飾りを副業としていた。農閑期には、村の中で金属音が絶えず聞こえ、炭火の煙が家を覆い隠すほど立ちこめ、繁忙な様子であった。しかし、現在は村落の中の銀細工職人たちは市場を追い求めるようになり、ほとんどが中心的な町に転居した。このことは、文化遺産の大きな損失であり、同時に銀飾民族としてのミャオ族の個性の保持と発展に不利となっている。

ミャオ族の銀飾りは、人類の服飾文化の宝庫の中で、個性際だつ魅力十分な傑作である。また、多元的な文化の中で１つの重要な文化遺産であり、人びとがこれに関心を持ち、理解し、保護するにふさわしいものである。

参考文献：

１．潘空智『苗族古歌』貴州人民出版社，1997年。
２．貴州省博物館考古組「貴州清鎮平壩石棺葬」，『考古与文物』1982年第３期。
３．貴州省博物館「貴州清鎮宋墓清理簡報」，『文物』1960年第６期。
４．『苗族簡史』貴州人民出版社，1985年。
５．郭子章『黔記』巻59（諸夷）第35册，貴州省図書館藏複制油印本。

6．嘉靖『貴州通志』卷3(風俗)，第 3 册，上海図書館藏影印抄本。
7．陸次方『峒溪纖志』、方亨咸『苗俗紀聞』、檀萃『説蛮』，『小方壺齋輿地叢鈔』第11帙。
8．拙著『苗族銀飾 · 概述』文物出版社，2000年。
9．拙文『中国貴州民族民間美術全集 · 銀飾巻前言』，貴州人民出版社，2007年。